

Title	視野を広げるにはまず自分が感じていることを疑ってみる：見上公一准教授に聞く
Sub Title	
Author	池田, 亜希子(Ikeda, Akiko)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2023
Jtitle	新版 窮理図解 No.36 (2023. 1) ,p.4- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應理工の科学技術社会論：より良い社会を目指した文理共創の試み 外国語・総合教育教室 見上公一 (准教授) インタビュー
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001002-00000036-0004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



視野を広げるには まず自分が感じていることを疑ってみる

人は科学・技術をどう生活に取り入れていくのか……自らの視点を持ちながら多くの人の話を聞き、さまざまな科学・技術と社会の関係性に迫ろうとしてきた見上さん。「科学・技術」と「人文・社会科学」は伴走して、共創関係を築くべきと考えるようになるまでには、科学技術社会論の研究者として数多くの経験を積んできた。

——早稲田大学附属の中学・高等学校だったそうですね。

中学、高校、大学と計10年間を早稲田で過ごしました。大学の先生が授業をしてくれたことがあり、質問したら「いい質問だね。それ研究してみたら？」と返答されて驚きましたね。高校までの覚える授業と違い、大学の先生が話すことの中には“答えがわからなくて自分で考えなくてはならないものがある”のだと。しかも、先生がそれを前向きに肯定しているんですから、何か別の世界があるように感じました。

自分では、貧困とは何かとか、資本主義が本当にいいものかなんてことを考えたりもしていました。

——大学では最初、経済学部に進学されましたね。

ぼんやりとですが、誰もが望む生活ができる世界が理想だと思っていました。当時はお金、つまり資本がないと何もできないと考えていたので、お金の流通を学ぼうと経済学部を選びました。学ぶうちに、経済学では物事をシンプルに捉えるためにモデル化するので、文化や嗜好などは考慮しないことが多いと気付きました。日本であろうとイギリスであろうと同じという前提から考えるのです。これは私の感覚に合いませんでした。

実際の消費者はそれぞれ違った価値観をもっていて、異なったものを求めている。この消費者ニーズに向き合うビジネス論に少しずつ関心が移っていきました。

——現在の専門である社会学を学ぶようになったきっかけは？

最初はビジネスコンサルタントになろうと学んでいましたが、この職業は経営学修士(MBA)を取得しないと本格的な仕事に就けないという話を聞きました。そこでイギリスのオックスフォード大学のサイドビジネススクールの修士課程に進みました。

この頃、研究紹介で話したように、「ハイブリッドカーに対する評価の国ごとの違い」について研究したいと思うようになっていました。自分で指導教官を探さなくてはならなかったのです。いろいろ調べました。そして気候変動の問題を専門に研究していた、スティーブ・レイナー教授を見つけてコンタクトをとったのです。その時、彼の師である文化人類学者のメア

リー・ダグラスが書いたものを読むように言われました。「人々の社会の捉え方が文化を形成する」といった内容で、後日スティーブのところに行き、つたない英語でポイントと思うことや感じたことを熱弁したのを覚えています。

——スティーブ先生はどのような方だったのでしょうか。

研究に関しては厳しさのある人で、ダメならダメ、よければいいとちゃんとやってくれました。調査研究を始めたばかりの頃は、うまくいっているのかわからずに不安になるものですが、それを解消してくれて、なおかつ学生であっても1人の研究者として扱ってくれていたと思います。

——この頃、「研究者になりたい」と思うようになったのでしょうか。

当初考えていたハイブリッドカーの研究は、英語のつたない学生が車のユーザーに直接インタビューするのが難しく断念しました。代わりに何ができるかを必死に考えて、日本人留学生が日本から取り寄せているものを調べました。薬とか歯ブラシなんかが多くて、生活必需品の中でも身体に関係するものは自分が親しんだモノにこだわる傾向がある、つまり文化との関わりが強いとわかったのです。これをもとに修士論文を書きました。

この調査はスティーブをはじめ、審査の先生方から非常に好評でした。自分の調査研究から新しいことがわかって面白いという気持ちと、自分が面白いと感じていることをほかの人もわかってくれるという喜びがあり、研究を続けてみようと思いました。

——研究は、その後どう発展していったのでしょうか。

博士課程では再生医療の調査研究をしました。修了時に、日本で仕事が見つかったので帰国しましたが、「科学技術社会論」は海外の方が盛んということもあって、いつかまた海外で研究をしたいと思っていました。

2014年にイギリスのエジンバラ大学で、ちょうどその時にやりたいと思っていた希少疾患の調査研究ができるポストを見





つけて、3年間で希少疾患研究が盛んなアメリカやヨーロッパでの調査を実現することができました。この時は子供たちも連れて行きました。特に、今小学生の娘は滞在中に5歳の誕生日を迎えて、エジンバラで現地の小学校に行くことになって、親子ともども異文化に触れる貴重な経験をしましたね。

——研究がお好きなのですが、息抜きには何かされていますか。

子供の頃からサッカーを続けています。今も、個人参加のフットサルで週に1、2回はプレーしています。息子が小学校に入ってサッカーに関心を持ち始めたので、最近是一緒にボールを蹴ったり、サッカーの試合を見に行ったりもしています。親子のコミュニケーションツールですね。

——いろいろな経験をされた見上先生にとって、慶應義塾はどのような場所でしょうか。

科学・技術を進めていくには、科学・技術のことだけを考えればいわけではなく、社会全体の中でどういうものであるべきかを考えなければいけません。こういう考えを大学生活にも取り込んで欲しい。学生は外国語や総合教育の授業を通して多様な価値観に触れる機会があるので、それはとてもいいことだと思います。

私自身、矢上キャンパスで研究をしている先生方のところに

積極的に向かっていますし、ここで科学・技術と人文・社会科学との「共創」の成功事例をつくりたいと思っています。そして、それを他の大学や多くの研究者にも広げていきたい。慶應義塾に来て始められたことが、これからどうなっていくかワクワクしています。

◎ちょっと一言◎

学生さんから：

●科学者・技術者と社会の双方向性が失われ、科学・技術が独り歩きしつつあると感じます。こんな時代に「科学/科学者の社会的責任」について同世代の学生と議論するのは大事だと感じて、見上先生の授業をとりました。科学から一歩引いて、人文・社会系の視点で現代社会における科学・技術の役割を考えようとしている点が面白かったです。

科学・技術は、時にその活用推進派が圧倒的多数の場合がありますが、そのような時にも見上先生は常に中立な立場を貫いて反対派の意見を尊重していました。その姿に自分の価値観はバイアスがかかっていたと気付かされました。

(4人の学生さんにお話を聞いてまとめました)。

(取材・構成 池田亜希子)

さらに詳しい内容は
<https://www.st.keio.ac.jp/education/kyurizukai/>

自分が面白いと思うことを、
ほかの人も面白いと思ってくれた。
この体験が研究者になることを
決意させた。

見上公一

Koichi Mikami

専門は科学技術社会論。生命科学を中心とした科学技術ガバナンスに強い関心を持つ。2004年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業。2010年にオックスフォード大学サイドビジネススクールで博士課程を修了し、2011年D.Phil. (Oxon) の学位を取得。総合研究大学院大学学融合推進センター助教、エジンバラ大学社会政治学研究科科学技術イノベーション研究部門リサーチフェロー、東京大学教養教育高度化機構科学技術インタープリター養成部門特任講師を経て、2019年に慶應義塾大学理工学部外国語・総合教育教室に専任講師として着任。2022年より現職。

